

アマゾン川委員会

伊地知克介

【登場人物】

- 馬場 地上げ屋。兄貴分
八木 地上げ屋。弟分
バナさん アフリカ出身の占い師
鹿田、牛山課長 外務官僚たち
サラ カンボジア難民の少女
啓子 バナさんへの依頼者。シングルマザー
流羅 啓子の息子
小林、鈴木 組織の男
チャン 中国人の地上げ屋／歩いてくる男1
健一 バナさんへの依頼者。水族館勤務
富樫 ナゾの男
シュウ 中国人の地上げ屋／歩いてくる男2
朗読者 1〜6 それぞれ無国籍、日本人、ドイツ人、米国人、
スウェーデン人、インドネシア人
- 【あらすじ】
- 大きく分けて3つのエピソードが同時に進行する。
- 1 そのバックネットのバランス
クマに追われた人のやくざが今は使われていない野球場のバックネットによじ登り、降りられなくなる。人の水源の土地を地上げしようと中国人グループと争っているのだが、クマが下にいるので身動きができない。兄貴分の馬場は退屈をまぎらわすため、弟分の八木に最近見た映画の話をするように要求する。
 - 2 のろわれた楽園
八木の見た「映画」という設定。アフリカ出身の占い師で、「流れるもの」に働きかける能力のある魔法使いのバナさんが日本で開業する。「呪いがかけられる」とうわさが立ち、さまざまな日本人が依頼に訪れるが、平和主義者のバナさんは穏やかな解決を図る。
 - 3 バッターズ

巨大彗星が近づいてくる。地球への衝突が現実味を増す中、国連インターンシップで知り合った各国の若者たちはラインを使って情報を交換するが、次第に絶望が深まっていく。

最後にこの3エピソードが一体となり、バナさんが魔法で地球の危機を回避しようとするクライマックスとなる。やくざたちが加わり、水の中の儀式が行われる。

この劇は「そのバックネットのバランス」(4エピソード)「のろわれた楽園」(3エピソード)「あまりにも多くの人がベンチに」(1エピソード)「バッターズ」(3エピソード)「巨大彗星の回避」(1エピソード)、エピソード(1エピソード)の6話13エピソードで構成される。「バッターズ」は役柄を離れ、若者たちのラインでの会話を舞台で読み上げる形で進める朗読劇である。朗読者1〜6は他の役と兼ねてもよいが、別人格であることははっきりと示す。「歩いてくる男1, 2」も同様で他の役と兼ねて良いが、別人格であることは示す必要がある。エピソードの順序は以下のとおり

- 1 そのバックネットのバランス1
- 2 のろわれた楽園1
- 3 あまりにも多くの人がベンチにバッターズ1
- 4 バッターズ1
- 5 そのバックネットのバランス2
- 6 のろわれた楽園2
- 7 バッターズ2
- 8 そのバックネットのバランス3
- 9 のろわれた楽園3

- ㊦ バッターズ3
- ㊧ そのバックネットのバランス4
- ㊨ 巨大彗星の回避
- ㊩ エピソード

(舞台上の設定) バックネットがあり、男2人がつかまっている。周囲にさすが3脚ある。いすなどを動かすことで、舞台は外務省の会議室になったり、バナさんの「占いの部屋」になったり、野球場になったりする。

場面は2014年を基本に過去や未来へ動く

第1場 そのバックネットのバランス1

バックネットにつかまっている男たち。
ここは過疎が進み、廃棄された村営の野球場。周辺には人もすまなくなっているようだ。使われなくなつてから相当の時間がたっているらしく、バックネットはぼろぼろである。男たちはバックネットの裏と表に1人ずつ、つかまっている。

馬場 どないなつとんねん。八木か。小林か、そこにおるんは。どっちやねん。

八木 八木です。見えないんですか。

馬場 めがねどつか落としてもうたんや。八木かおまえ。熊

八木 はいるか。

馬場 熊います。真下！。

八木 「います」、なんか。「いました」なんか。どっちやねん。

馬場 は？

八木 はつきりせえよ。「います」なんか、「いました」なんか、現在形なんか、過去形なんか、どっちや？

馬場 「います」です。「います」。われわれの真下におるんです。こつち見えます。

八木 小林は？どこや

馬場 見なかつたんですか？あれを。

八木 なんか叫んでんのは聞こえた。小林熊に食われたんか。

馬場 食われたのかどうかは分かりませんが。

八木 なんや？

馬場 熊に追いつかれて、のしかかられてんのは見えまして。

八木 うわーいうて、それ以上は見えてません。ぼく怖くて怖

馬場 情けないやつや。

八木 先輩振り向きもしませんでしたやんか。

馬場

馬場

八木

馬場

想定外やな。熊どつか行く気配ないか。こつち見えます。あ、バックネット登ろうとしてる。

(上に登って逃げようとする)

先輩、やめてください。これ、倒れそうや。あ。

八木 なんや。

大丈夫、バックネットは登られへんみたいですよ。熊。よかったです。

八木 でもまだこつち見えますわ。

馬場 しつこいやつやな。

八木 ここにいれば大丈夫でしょう。先輩落ちんといってください。

馬場 落ちひんよ。

八木 このネット、ぐらぐらやから。

馬場 おれが落ちると、おまえの重さでそつちに倒れるか。

八木 たぶん。

馬場 おまえも絶対落ちんなよ。

八木 落ちませんよ。

馬場 八木おまえチャカ持ってへんのか。熊公撃つてまえや。

八木 チャカ？

馬場 拳銃やがな。持ってへんのか。

八木 今回の仕事はそんないらんって先輩言っていましたやん。

馬場 念のために持ってこようとか、そういう心がけはないんか。

八木 先輩は？

馬場 熊があきらめるまで、ここにおるしかないんやな。

八木 しゃあないですね。

馬場 ああ、腹立つな。(間) 八木。

八木 はい。

馬場 なんか場を和ますようなこと言えや。

八木 この場を？

馬場 他にどんな場があるんや。

八木

馬場

八木

馬場

馬場 どうなんや。おまえ最近なんか見てへんのか。
八木 あんまりええの見てへんのですわ。変わったのぼつか
りで。

馬場 ええよ。変わったやつらの話せえや。

八木 そうですわね（短い間）一番最近に見たのは

馬場 タイトルからいえや。

八木 「のろわれた楽園」

馬場 なんじゃそりやあ。

八木 邦画ですわ。

馬場 コメデイ？ホラー？SF？

八木 その3つの中間？

馬場 なんじゃそれ。

八木 アフリカから来た占い師、この人、ほんまは魔法使い
なんですけどね。訪ねてくる日本人の悩みを、この人
がいろんな変わった魔法を使って解決していく話です
わ。

馬場 話してみいな。

八木 ええんですか。そうですね。映画はこのバナさん、ア
フリカ人の女の人はですわ。この人が日本で難民の認定
を申請してね、外務省で職員と話し合っているところ
から始まるんですわ。

馬場 牛山、鹿田、バナが登場。それぞれの位置に付く。

八木 それで外務省の牛山という課長が突然変なことを言い出
すんですわ。

馬場 馬場と八木の背中に羽が生えてくる。

八木 羽生えてきたで。

馬場 これで飛べますか。

馬場 どやろな。映画の話、続けえ。

八木 分かりました。それでね。

2人はバックネットから離れ、宙を舞うように静かに姿
を消す。

第2場・のろわれた楽園 外務省

外務省の会議室。牛山と鹿田がバナと向き合っている。
鹿田とバナは真剣ににらみ合う感じ。

牛山 私はドラえもんというやつが大の苦手ですね。
鹿田 は？

テレビで見ている分にはいいんだよ。あれは15分15
分で短いだろ。原作も短編集なんだよ。困るのは映画
館だよ。子どもが好きなんで、ときどき付き合われる
んだけどね。1時間40分もあると苦痛だね。何が苦痛
かって、どうしても疑問が出てくるわけだ。このピンチ
はどこでもドアで逃げればいいじゃないか、相手を小さ
くするライトを使えばいいじゃないか、そもそもタイム
マシンで5分前に戻れば、このピンチは避けられるぞつ
て。いらいらしてくる。なんでもできるのに、わざわざ
漫画になるためになんにもしていない気がするんだ。

鹿田 課長、牛山課長

大体さ、ドラえもんはあんなになんだってできるのに、
のびたくんのことしか考えてないじゃないか。自分の能
力とか道具を社会をよくすることとか、世界を変革する
ことに何も生かしていないよね。それってどうなんだ。
おかしくないか。もったいなく、

鹿田 課長、牛山課長。今はこの人（バナを示し）を難民と
して認定し、わが国で保護するかどうかについて話し合

牛山 つているところです。課長のご家庭の週末の過ごし方については、話し合っていないせん。

牛山 君はこう思っているだろう。私がこの場には無関係なことを急に言い出したと。

鹿田 思うでしょ。

牛山 私が言いたいのは、魔法使いにも限界があるということだよ。サリーちゃんは子ども。ハリ・ポッターは修行中。なんでもできるわけじゃない。

鹿田 ますます無関係なことを言い出していると感じますが、あなたは（バナに）国では魔法使いと呼ばれていた。

牛山 そうですね。

バナ シャーリアーア。

牛山 それは。

バナ 普通の人が、できないことをできる人。そういう意味だね。

牛山 つまり、なんでもできるのか。

バナ そんなことはない。

牛山 わが国があなたを受け入れるとして、あなたが何をでき、何をできないか、それを知っておくことが必要だ。日本人は魔法使いを嫌いなわけじゃない。

牛山 ドラえもんも一種の魔法使いだ。日本人はむしろ好きだよ。ほかにハリ・ポッターとか、トトロとか、崖の上のポニョ。だがその魔法の本身によつては日本人が受け入れられないものかもしれない。その力を何に使うのかも重要だ。世の中を変えるのか。のびたくんのためだけに使うのか。のびたくん、意味分らない。

鹿田 アフリカ人の80%は知らないと思います。

牛山 教えてほしい、何をでき、何をできないか。正しい答えがほしい。私たちはそれを聞いて判断したいんだ。

バナ （間）シャーリアーアには役割がある。ある者は土

牛山 をつかさどる。ある者は風。ある者は炎。ある者はイナゴの群れ。

牛山 あなたは。

バナ 水。

鹿田 水？

バナ 水だ、ウォーター。

牛山 水をつかさどるシャーリアーアなんだな。水を操れるんだな。

バナ シャーリアーアはなんでもできるわけではない。できるのはわずかなことだ。

牛山 何ができる。教えてくれ。

バナ 私ができるのは、流れを変えることだけだ。

鹿田 流れを変えるって？

バナ 東に流れているものを南に、早く流れているものを遅く、少ししか流れていないものをたくさん。

鹿田 そういふことだ。

牛山 ばかばかしい。

鹿田 面白い。

牛山 え？

牛山 そうすると早ばつときに役立つわけだね。あなたの能力は。

バナ 小規模な早ばつなら。

牛山 という？

バナ 人の力を超えたどんな力も限定的なのだ。私は流れを変えられるだけ。流れていないものを流れるようにすることはできない。枯れてしまった井戸から水を出すことはできない。

牛山 ひとつ聞きたい。津波はどうですか。

バナ 起きてしまった津波をなかつたことにできるかと？災害時に私の能力が使えるのか、と聞くのか。

牛山 できるかね。

バナ 不可能だ。津波を止めることはできない。起きて

鹿田 課長、牛山課長。
牛山 なんだ。
鹿田 バナさんは、現在の法解釈では難民の認定基準を充たしていないと考えられます。
牛山 だからなんだ。
鹿田 そんなに安易に難民として受け入れていいものではないか。
牛山 君は外務省入省のときから、難民問題の担当を希望していたそうだね。

牛山 いない津波を起こすこともできない。できるのはできるのは
バナ ここに向かっている津波を隣のまちへ。
牛山 それはできるのか。
鹿田 課長。
バナ やったことはない。だが、できるかも。
牛山 難民認定の方向で調整しよう。
バナ 本当か。感無量だ。
鹿田 課長。

牛山 (バナに) その代わり、日本政府があなたに頼み事をするかもしれない。そのときは聞いてくれ。
バナ この国に住まわせてくれるんなら、喜んで協力するよ。
牛山 ひとつ確認したい。
バナ 何？
牛山 なぜあなたは国で「殺し屋」と呼ばれていたのかね。人をのろい殺すのかね。
バナ 根も葉もないうわさを立てるやつがいるのさ。
牛山 信じていいね。
バナ もちろんさ。バナさんは親切な人。人を死なせることにはけっして手を染めたくない。本当だ。

バナ、牛山と握手して退場。

鹿田 そうです。
牛山 珍しいね。何か特別な経験でも？
鹿田 高校の同級生にカンボジア難民がいました。
牛山 そうか。難民たちの苦難を知り、自分は彼らのために役に立ちたいと、そういうことか。
鹿田 そこまで単純ではありませんが。
牛山 国益というものがあるんだよ。鹿田君。私たち国家公務員が考えるべきことはまず、国益だ。
鹿田 それは分かりませんが、あの人は。
牛山 役に立つかもしれない。南海トラフ巨大地震を知っているね。
鹿田 150年に1度、日本に大きな被害をもたらす、地震だけでなく、津波も脅威です。まさか。
牛山 東京に津波が来ると、日本の政治経済は一気に破たんする。大混乱だ。そうした事態を避けるのはまさに国益だ。
鹿田 あの人は津波を止めることはできないと。
牛山 止めなくてもいいんだよ。千葉あたりにちよいと行き先を変えてもらえば、首都圏直撃よりはずっといい。そうは思わないか。
鹿田 賛成できません。
牛山 なぜだ。
鹿田 千葉県には妻の実家が。
牛山 じゃ、神奈川でも茨城でもいいさ。そのとき考えよう。さ、もう5時だ。(ネクタイを外す) 私は六本木に繰り出すが、付き合うかね。
鹿田 (ネクタイを外しながら) いえ、私は10年前に。
牛山 そうか。ここからは個人の時間だ。私は踊るが。
鹿田 私は野球を。
牛山 好きにしたまえ。野球は人類の素晴らしい発明だが、踊りは神から人類への素晴らしいプレゼントだよ。

第3場

牛山、ネクタイを頭に巻いて踊りながら退場。鹿田はスーツを脱いでいく。下に野球のユニホームが現れる。ユニホーム姿の18歳の鹿田はバックネットに近づき、強く揺さぶり、けりつける。近くのいすに（スタンドに見立てて）座る。蟬の声。

あまりにも多くの人がベンチに

サラ、登場。高校の制服姿。

サラ タカシ、I SEARCH YOU. YOU ARE CRYING YET?

鹿田 NO. I ONLY PASS THE TIME HERE. I HAVE NO TEARS FOR THE GAME. YOU KNOW THE BASKETBALL GAME. THEY DEFEND US

牛山 鹿田君。鹿田君。

鹿田 はい。課長なんでここに。

牛山 日本語でやりたまえ。日本語で。私の見るところお客さんの85%が、無理な感じだ。

鹿田 分かりました。

サラ タカシ、探したよ。ずっとここで泣いていたのか。

鹿田 ぼーっとしてただけだよ。14対0で負けじゃ、涙も出ないさ。ひどい試合。見てただろ。

サラ 私野球見るの、初めてね。みんなここで歌うし、踊るし、楽器も鳴らすし。お祭りみたい。すごいね。思ってるうちに、終わった。井上君が前のめりに倒れて、

鹿田 泥だらけになって。みんなが「ああ」って。女の子は「わあ」って泣くし。負けたのは井上君が悪いのか。

鹿田 あれはヘッドスライディングって言うんだ。いのつちは最後のバッターだっただけで、別に悪いんじゃないんだよ。おれを探してたの？

サラ

私、タカシに言おうと思った。いつも野球で忙しそう

鹿田 で言えなかった。「ありがとう」と「さようなら」ね。

サラ そうか。アメリカに帰るんだ。

鹿田 向こうの新学期、9月からだから。

サラ そうか。でもなんでおれに。

鹿田 タカシはいつも私に親切だった。他の男の子はみんななんか私との間に壁を作るんだ。タカシはそうじゃなかった。話しかけてくれたし、いろんなことを教えてくれた。日本の歌とか。ことわざとか。タカシの前では、私、「ガイジン」じゃないみたいだった。

鹿田 英語、好きなんだ。

サラ きょう、カッコよかったよ。

鹿田 え？

サラ 日本人の女の子みたいに「カッコイイ」って大声で言

鹿田 いたかった。タカシはすぐく一生懸命ボールを投げて

サラ たし。あんなに速いボールを投げて、誰にも打たれて

鹿田 いないのに、負けるなんて。

サラ サラ、野球を知らないんだ。アメリカ人なのに。

鹿田 アメリカで生まれたんじゃないから。アメリカ人にな

サラ ったのは、わたしが10歳のとき。

鹿田 おれは、試合に出てないんだ。

サラ どういうこと？

鹿田 投げたのは、ブルペンで投げたんだ。投球練習つ

サラ ていうんだ。試合とは関係ないんだよ。おれは結局、

鹿田 1回も試合に出してもらえなかった。ピッチャーだけ

サラ ど、実力不足でさ。きょうはずっとつらかった。仲間

鹿田 が目の前でつらい思いをしているのに、おれは何の役

サラ にも立たない。じゃあおれは何のためにここにいるん

鹿田 だ。サラ。分かるか。こんな思いをしたことがあるか？

サラ ベンチにただ座ってるだけで、何もできない。存在に

鹿田 意味が無い。そう思えてくること。あんなの人生に、

サラ そういうこと、あったか？

サラ

あるよ。私にもあるよ。座ってるだけで、何もできなくて、つらかったこと。

タカシ
サラ

私がアメリカ人になったのは、私の国が戦争になったから。同じ国の人間同士で、同じ国の中で、銃で撃ち合った。殺しあったの。知ってるでしょ？何も悪いことをしていないのに、殺された人がたくさんいたね。私5歳のとき。私の家族全員、殺されそうになったの。私たちは隠れた。河の中に。私はここまで（鼻と口の間に手で示す）水に入った。遠くで村の家々が燃やされて赤い炎が広がるのが見えた。私のうち、となりのうち、そのとなりのうち。燃えてた。赤い火と煙が、すべてをのみこんでた。村を出る前に家族のひとりがつかまってしまった。わたしのおじさん。おとうさんの弟で、学校の音楽の先生だった。いつも笑ってた。しよっちゅう歌ってるから、ニックネームは、「オルゴール」。何人もの人が撃たれた。悲鳴が聞こえた。河にほうりこまれた。水が「がしゃん」と鳴って、顔の前を血だらけの人が流れていった。何人も、何人も。おじさんが男たちにつかまって、地面に座らされるのが見えた。おとうさんが河の中で、私を抱いて、目と口をふさいだ。見せないように。でもおとうさんの手はがたがた震えていて、見えたの。おじさんの様子が。

サラ、顔の前に手をかざして指の隙間からものを見る様子を示す。ヘリコプターの爆音や銃声、地雷の爆発音が聞こえてくる。

サラ

村じゅうの家に火が燃えうつっていたの。水の中の私たちが汗をかくほどの熱さ。明るくなって、すごくよく見えた。おじさんは男たちにけん銃を突きつけられていた。いつも笑顔なのに、怯えて真っ青になって

サラ

いた。取り囲んでいる男たちのだれかがわたしたちの家族がどこに行ったか、尋ねた。おじさんの声は聞こえなかった。聞こえたのは拳銃の音。おじさんはまず足を撃たれた。悲鳴が聞こえた。誰かがしゃべれと怒鳴った。おじさんは、しゃべらなかつた。（間）歌ったの。カンボジアの古い歌だと思う。よく聞こえなかつたけど、歌ったってことは分かった。どういう気持ちだったか、分からない。でもたしかに、おじさんは歌った。両手をこうやって（頭のうしろで手を組む）組まされて、地面に伏せながら、地面に向けて歌った。だれかがまた撃った。おじさんの頭が割れて血が噴き出すのが見えた。撃った男は、まだ少年のように見えた。倒れたおじさんをまたいでこつちに走ってきて、草の上に、げえって吐いた。おじさんは前のめりに倒れた。さっきの井上君みたいに。砂煙が立つのが見えた。

蝉の声。

私は悔しかった。なんとかしたかったの。大好きなおじさんを助けたかったのに、できなかった。座っているしかなかったの。飛び出して行って、やめてって大声で言いたかった。そんなことをしたら私やおとうさんも殺されてしまうかもしれない。だからできなかった。何もできなかったの。タカシ、世界中にベンチがある。いっぱいある。そこにたくさんの人が座っている。たくさん、たくさん、たくさんの人が。痛い心と冷たくなる胸。炎に包まれる、愛する場所。目の前で、起きている信じられないこと。飛び出して行って、なんとかしたい。でも私たちのように、何もできないで、座っている。動きたくても、動けないで。

蝉の声大きくなる。そして、静かになる。

サラ もう行かなくちゃ。

鹿田 オルゴール。

サラ おじさんのあだな。

鹿田 おれも子どものころ、あだ名オルゴールだったよ。

サラ オルゴール？タカシが？いつも歌ってたのか。

鹿田 ビールケースの上だね。家、酒屋なんだ。

サラ いつから歌わなくなった。

鹿田 子どもじゃなくなった時。

サラ 今でも大人じゃないよ。野球ばかりやってるじゃないか。

鹿田 それも終わりだ。きょうで最後だよ。

サラ、立ち止まり、目を見開き、前方を見つめる。

サラ ウォーター！

蝉の声。

サラ あれは何か。野球のルールと何か関係があるのか。

鹿田 スプリングラーでグラウンドに水をまいているんだよ。

乾燥しすぎないように。

サラ 世界って、美しいな。

鹿田 え？

サラ 世界って、美しい。タカシはそう思わないか？

鹿田 おれはそうは思わない。でもいつか、そう思えたら、うれいかもしれない。

蝉の声大きくなる。朗読者たちが現れる。全員、めがねをかけている。並ぶ。国連のインターンシップで知り合った各国の大学生たちである。蝉の声静まり、音楽。鹿田、サラは退場。

第4場 バッターズ1

朗読者1

2013年度CIAファイル、ナンバー89121
重要度F、リスク判定D、キーワード・緊急事態、
シリア、ジャパニーズヤクザ、バッターズ、南から

来るもの

朗読者2

ラインで呼びかける

朗読者3

それが正しいか不明

朗読者2

でも呼びかける

朗読者3

サラ・ジョンソンが危険。

朗読者2

緊急事態

朗読者4

誰

朗読者2

国連のインターンシップ

朗読者3

私たちを指導

朗読者2

人気者のサラ

朗読者5

サラ・ジョンソン

朗読者3

アジア系米国人

朗読者6

今アフリカのどこかにいる。

朗読者2

サラはシリアにいる。

朗読者3

停戦協定を担当。

朗読者4

危険。

朗読者3

シリアの混乱状態について

朗読者2

何か情報は？

朗読者6

大変な混乱。

朗読者1

化学兵器

朗読者5

ジャーナリストの殺害。

朗読者4

大変危険。

朗読者3

国連スタッフにまで危害が及ぶ状況？

朗読者4

その通り、大変危険。

朗読者1

大量破壊兵器は実はイラクにはなかった。

朗読者3

でも、私たちにできることが何かあるだろうか。

朗読者1 アメリカにはあつたけど。
朗読者2 当面はないわ。
朗読者3 でも、情報を集めましょう。
朗読者4 できることがあるかもしれない。
朗読者5 ユリの呼び掛けに応えよう。
朗読者6 われわれはそれぞれ別の国に
朗読者1 多様な場所に、多様な情報
朗読者2 多様な情報が、役立つ。
朗読者3 おそらく中には不要な情報も。
朗読者4 デマ、不確実なうわさ
朗読者5 流言飛語のたぐい
朗読者6 今サラのために
朗読者1 無事を祈り、情報を集めよう。
朗読者2 国連のインタースシップからずいぶんたつけど
朗読者3 みんな元気だった。
朗読者4 元気。
朗読者5 国連に戻りたいよ。スウェーデンは退屈。
朗読者6 おれも戻りたい。インドネシアは暑い。
朗読者1 世界中で人々が感じてる暑さ。それには原因がある。
朗読者2 ユリ、日本は大丈夫なの。
朗読者3 日本についての情報
朗読者4 ドイツにもフクシマのことは断片的に伝わっているわ。
朗読者1 今は、すぐにニュースが伝わる
朗読者2 汚染水が漏れ出していると聞いたけど。
朗読者3 ありがとう。今は見守るしかないの。
朗読者4 日本人はフクシマでよくやってるよ。
朗読者5 私の国では必ずしもそうは評価されていないわ。
朗読者6 事故を起こした以上、厳しい評価は当然だと思う。
朗読者1 だがフクシマ第一原発が火災を起こした時
朗読者2 日本人の消防士たちは近づいて、放水したんだぜ。
朗読者3 サムライ。

朗読者6 そんなことをする責任はないのに。
朗読者3 世界中で、あのとき、みんながフクシマを見つめて心の中で叫んでいた。
朗読者5 早く温度を下げなければ
朗読者1 早く冷やさなければ大変なことになる。
朗読者2 お願いだから早く水を。
朗読者3 ウォーター
朗読者4 それは人を三重苦から解放する言葉
朗読者5 ユリ、とにかくおれは日本人を応援しているよ。
朗読者6 ありがとう。
朗読者1 ユリ、まだジャパニーズヤクザと交際しているの？
朗読者2 4、5、6 早くやめなよ。
朗読者3 ありがとう。でも、彼はきつと立ち直るの。私は信じてる。
朗読者1、3、4、5、6 だまされてる。
朗読者2、4、5、6 だって、他の女ともつきあってるんでしょ。
朗読者1、4、5、6 なんかも、五大陸の女性とつきあうことを目指しているんだって。
朗読者1 南極が無理
朗読者2 南極が無理
朗読者3 南極が無理
朗読者4 南極が無理
朗読者5 南極が無理
朗読者6 ユリ、よく考えるんだ。いつでもおれがジャカルタから、駆けつけるから。
朗読者1、3、4、5 こいつもだまそうとしてる。
朗読者2 シリア、フクシマより大きな危険。近づいてる。
朗読者1 流言飛語のたぐい
朗読者2 そういううわさを耳にしていらないか？
朗読者3 何を言い出すの？ダン。根拠のあるうわさ？
朗読者4 流言飛語のたぐい

朗読者 4 分からない。ただ、大きな危険だと。ネット上で広がっている。

朗読者 1 ネット上で広がる情報には、それ自体の危険も

朗読者 5 戦争や原発事故より危険？なんだ？

朗読者 4 分からない。ただ、南から来るものだと。

朗読者 1 バッターズでさえ、それをヒットできない。

朗読者 4 そういう言葉だけが拡散している。

朗読者 1 野球は人類の素晴らしい発明だ。

朗読者 2 バッターズでさえ、ヒットできない？何それ。

朗読者 3 ヨーロッパの人間に野球の話をしていないで。

朗読者 6 メジャーリーグの投手なら、そこまで危険じゃないよ。せいぜい、乱闘だ。

朗読者 1 野球をしている時、人は笑顔。

朗読者 6 人類の偉大なる発明

朗読者 3 人類は滅びない。そんなに簡単には。

朗読者 2 バッターズでさえヒットできない。南から来るもの。

朗読者 1、3、4、5、6 不安。なんだか分からない不安。

朗読者 2 世界を包む不安。

朗読者 1、3、4、5、6 なんだか分からない不安。

朗読者 2 このときはまだ、そうだったのです。

朗読者 2 このときはまだ、そうだったのです。

溶暗。

第5場 そのバックネットのバランス2

馬場 なんの罰ゲームやねん。なんの罰ゲームやねん。こんなところで、熊とにらめっこって。どうやねん。

八木 こういうの、疲れますね。

馬場 落ちんなよ。

八木 先輩こそ。

馬場 くそ、誰か野球やりにこうへんかな。

八木 それは無理でしょう。ここ、野球場っていうより、廃

墟や。長いことだれも野球やってないでしょう。

馬場 くそ田舎が。

八木 先輩。

馬場 なんや？

馬場 地上げって、都会でやる仕事やと思ってました。

八木 20世紀はそうやったんやろな。おれらの先輩が食い

荒らして、都会にはもう地上げする場所がないんすか。

八木 あるけどな。少ないんや。それをいろんなやくざとか、

馬場 外国人が奪い合ってるんや。これからは、田舎にこな

あかんのや。

八木 田舎は、もういいです。こんなリスクが

馬場 やくざがリスクを恐れてどうすんねん。リスクがある

八木 ところに、リターンもあるんや。

馬場 先輩、PWって何ですか。

八木 どこで聞いた。

馬場 事務所先輩がボスに耳打ちしてるのが聞こえました。

八木 PW、八木と小林連れて、とってきますわって。

馬場 おまえ耳いいな。

八木 それほども。

馬場 PWはな。略語や。

八木 それは分かります。ペナルティキックが、PKみたい

馬場 なもんですよね。

八木 なんでも言ってみ。当てたら、教えたる。

馬場 分かりませんよ。パイナップル・ワイン。

八木 まずそうやな。

馬場 ピンク・ウーマン。

八木 やらしそうやな。

馬場 パートタイム・ウインド

八木 涼しそうやな。

馬場 ポケット・ワンダーランド。

八木 小きそうやな。

八木 パルプ・ワイヤー
馬場 軽そうやな。
八木 ピース・オア・ウオー
馬場 ピースの方がええな。
八木 無理です。
馬場 パーフェクト・ウオーターや。
八木 何ですか？
馬場 完全な水やな。水もいろんな成分を含んでてな。場所
によって違うねん。硬水とか軟水とか聞いた事あるや
ろ。
八木 完全な成分の水が、こんな山の中にあるんですか。
馬場 世界一らしいわ。
八木 世界一？
馬場 それを使えば、ロケットや人工衛星が一番故障無く飛
ぶらしいで。人が飲んでも身体にええらしいわ。この
山の上に、それがわき出ている洞窟があつてな。
八木 はい。
馬場 竜が棲むという伝説があつてな。地元の人も近づかへん
らしいわ。
八木 竜が？
馬場 おるわけないわな。熊はおるけどな。
八木 その洞窟のある場所を地上げするんですか。
馬場 持ち主はまだその値打ちに気づいてへんわな。しかも
このあたり、過疎や。みんな村捨てて出て行くばっか
りや。
八木 せっかく作った野球場も熊の巣になってるくらいです
からね。
馬場 どや、いい仕事やる。
八木 ええですな。もうかりそうっすね。
馬場 そやから！こんなところにいるわけにはいかんや。
八木 熊さえいなければね。
馬場 こんなんしてたら、あいつらが先に着いてしまうやな

八木 か。
馬場 あいつら。
馬場 チャイニーズのやつらやがな。
八木 あいつらですか。チャイニーズ・マフィアがこんなと
ころにも手を伸ばしとんのですか。
馬場 そや。あいつらに負けるわけにはいかんや。くそ。
八木 熊はよどつかいかなかな。
馬場 まだ行く気配ないっすね。
八木 いずれは寝るんやろ。熊も。
馬場 絵本では、ベッドで寝てました。
八木 絵本と現実が違う。
馬場 ま、そうでしょうが。
馬場 映画の話せや。
八木 さっきの「のろわれた楽園」の続きでいいんですか。
馬場 ええよ。そのアフリカの女がどんなことするんや。
八木 そんな大したことしないんですけどね、とりあえず占
いの店を開くんすわ。
馬場 占いの店。
八木 そこに日本人の女が相談に来るんですわ。これがとん
でもない女でね。
馬場 2人に羽が生えてくる。
馬場 わ、また生えてきたで。
八木 飛びましょ、今度は飛びましょ。
馬場 映画の話が続けえ。面白く話せよ。
八木 そうすると飛べるんすか。飛べるんすか。
第6場 のろわれた楽園2 スプリングラー
バナ登場。バナの占いの部屋である。

上手から啓子登場。荒れた生活を思わせる派手な服装と態度の若い女。

バナ ようこそ「占いの館」へ。

啓子 もうかっつてるみたいね。

バナ 自分で言うのも変だけどね。占いが当たると評判ね。

啓子 うそでしょ。裏の仕事の方が評判なんじゃないの。

バナ 裏も表もないね。(自分を指さし)バナさんは正直者ね。

裏の仕事なんてないね。変なこと言うね。

啓子 これまで、どのくらい呪い殺したのさ。

バナ (カーテンを閉める)大きな声、ダメね!

啓子 なによ。

バナ 人に聞かれたら大変ね。

啓子 いいじゃん。

バナ 秘密の仕事ね。

啓子 いいじゃん。呪いで誰かが死んでも、あんたを逮捕できないでしょ。

バナ 誰を

啓子 え?

バナ 誰を呪い殺してほしいね?自分をだまして捨てた、男?

啓子 そうじゃないよ。

バナ 許せないキヤバクラの先輩か?

啓子 キヤバ嬢じゃねえよ。

バナ ちがうのか。

啓子 あたしが働いているのはガールズバーっていうんだ。キ

バナ ヤバクラじゃない。

啓子 どっちもアフリカにはないから、あたしには区別つかない

いね。

啓子 アフリカには何もありませんよ、

バナ 最古の人類の骨は、アフリカで発見されたんだよ。人類

という泉はアフリカでわき出しているね。馬鹿にしたも

んでもないよ。

啓子 いくらで頼めるの。

バナ 何を。

啓子 いくらで、殺してくれるのよ。

バナ 誰を殺すかによるね。

啓子 何それ。あんたここで呪いをかけるんですよ。遠くから

ライフルで狙う訳じゃない。相手が誰だろうが、同じでし

ょうが。均一料金にしないよ。

バナ あたしは自動販売機じゃないね。

啓子 あんたが自動販売機だなんて言っていないよ。

バナ 100円入れたらコーラが出てくるとか、そういうもん

じゃないね。人を呪うには、それなりに、裏切られた恨

みとか、理不尽さへの怒りとか、いいかい、そういうも

のがいるでしょうが。そういうものがあって、初めて人

を呪うことができるね。

啓子 めんどくさいね。

バナ 誰を殺そうとしているか。

啓子がポケットから写真を取り出す。バナに渡す。バナ

はめがねを取り出し写真を見つめる。

バナ かわいいね。

啓子 私に似てるのよね。

バナ あなたの子どもね?

啓子 (うなずいて)4歳。

バナ 三輪車に乗ってる。

啓子 今は自転車。

バナ かわいいねえ。このくらいの子どもが一番かわいいって

いうね。

啓子 名前、流羅っていうんだ。

バナ 日本人じゃないみたいだな名前だ。それで、誰を？

啓子、写真を指さす。

バナ どういうことね？

啓子 そういうことよ。こいつをやってほしいんだけど、

バナ ちよっと待って。これはあなたの子どもね。

啓子 そうよ。

バナ あなたが産んだ？

啓子 そう。

バナ なんで殺す。

啓子 面倒くさくてさ。

バナ それで？

啓子 リセット。

バナ 何考えてるのさ。

啓子 顔かわいいけどさ。ろくなものにならないよ、こいつ。

バナ まだ小さいのに、うそばかりつくし。歯は磨いたの？

啓子 て聞くと、磨いたよ、って。そういうときだけかわい

バナ 声で。でも歯ブラシはぬれてないし。きょう、じゅんち

バナ ちゃんに泣かされた、ってかわいい声で言うから、じゅん

バナ ちゃんのママに文句言ったら、逆よ、りゆうちゃんがい

バナ ろんな子どもの顔をたたいて、腕とか足をつねって。み

バナ んなのミルクに「こうせいしんやくだぞー」って言いな

バナ げら、泥を入れて回ってクラス全員を泣かせたりとか。

バナ あきれたね。

啓子 あんたは金さえ出せば、人を呪い殺すってね。

バナ 西アフリカの村にはバラ克蘭ジャンの伝説があるね。

バナ バラは水、克蘭ジャンは鳥。白い、水辺に飛んでくる

バナ 鳥。赤ちゃんは、その鳥が運んでくると言われているの。

啓子 日本でもコウノトリがどうかいうよね。

バナ 村では、子どもが生まれるとみんなでバラ克蘭ジャン

バナ の歌を歌ってお祝いするね。みんなでヤギを殺して、肉

啓子

を食べて、掛け合いで歌って、そして踊って、水鳥に感謝するのさ。子どもは、神様が水鳥に託して、村に授けた、そう、村の宝物。

あたしは大きな家で育ったんだ。生まれた家は大きくて、広い庭があって、芝生があった。そこで転げ回って遊んだんだ。世間からは、いい家のお嬢さんだと思われてた。

でもあたしの母はひどくてね。気持ち悪いほど優しいこ

とももあるけど、急にぶち切れて、ひどい殴り方をするんだ。それも手じゃないよ、物だよ。すりこぎとか、胡椒

引きとか、おろしがねで殴られたときは血だらけになっ

たよ。なんだったんだろ。何か得体の知れないものにと

りつかれて、怒りの発作が来て、そうすると、わけわか

かなくなるんだ。ああはなりたくないよな、と、小さい

ころはよく思ってた。でもさ、このままだと、あいつと

同じになりそうなのさ。あたしがひどいことをする前に、

あんたがやってほしいのさ。

バナ、物入れから奇妙な機械を取り出す。

バナ、物入れから奇妙な機械を取り出す。

啓子 何？

バナ どうかね。ろくでなしになるかどうか、見てみようか。

啓子 は？

バナ それからでも遅くはないね。その、歯磨きしない、うそ

バナ つき坊主が、あなたくらいの年になった時、どんな人間

バナ になっっているか、見てからでも、遅くはないね。

啓子 何を言っているの？

バナ 流れを速めて、24歳の彼を見るね。

啓子 なにいつてんのさ

少し暗くなった部屋に、男たちがどやどやと入ってくる。鈴木と小林が24歳になった流羅を抱え、地面に投げつ

ける。そのまま2人がかりでけりつける。彼は両手を後

ろ手に縛られている。チャンは下手のやや離れた位置に立ち、馬場（20歳年を取っている）はバナと啓子の近くに立つ。

バナ どいつが流羅ってやつかね。

馬場 あのボコボコにされとんのが、そうや。

バナ なにをやらかしたんだい。

馬場 ヤクの横流しや。

啓子、顔色を変え、口に手を当てて、黙り込む。

チャン （流羅の前にかがみ）SAY HONESTLY、W

HERE ARE DRUGS?

鈴木 （この男の役割は通訳である）正直に言え、リュウ。ヤ

クはどこだ。

チャン YOU BOUGHT ALL DRUGS TO

ANOTHER NETWORK?

鈴木 ヤクを全部流しちまったのか？別の組織がからんでんのかよ。

かよ。

流羅、意識がもうろうとしているらしく、答えられる状態にない。小林、バケツにくんできた水を流羅に頭から

かける。

バナ この様子じゃ、自分で使っちゃったんじゃないか？

馬場 それやったら、こいつ助からへんな。ま、どっちにしても無理やろうけどな。

チャン ANSWER ME!

鈴木 答えろ。

流羅、葉が効いているのか、ニヤリと笑う。

小林 このやろう。

小林、流羅をさらにひどく殴る。この男は熊に襲われた古傷がある。

啓子 なんて横流しなんか。

馬場 横流しってのは、蛇みたいなもんや。スプーン一杯ちょいとかき出して、売って遊び金にするなんてのは、みんなやってるわな。そやけどな、そこにしがらみがつく、女がからみつく、金がからみつく。鎖みたいにな

って、長くなってるって、重くなってるって、体に巻き付いてくる。そしてそれが、南米の大きな蛇やと気がつ

いた時は遅い。そこに、シヤアア。口と牙があるねん。

このせりふの間にも、小林が激しく流羅を痛めつける。

チャン YOU TALK WITH SOMEONE?

鈴木 兄貴、誰かとしゃべってるのかって、聞いてます。

馬場 独り言や。気にすんな。

鈴木 HE SAID HIMSELF HE SAID YOU

「DON'T MIND」

バナ あんたたち、何かね。外国のマフィアの使い走りかね。

馬場 2014年に戻ったらみんなに言っちゃおうだ。国際

化への対応の遅れが、こういう事態を招くんや。

小林 だめだ。こいつ、しゃべりやしねえ。

チャン CUT HIS FINGERS

男たちはぎよっとする。

チャン CUT HIS FINGERS YOUR TRA

DITHONAL CULTURE

鈴木 指を切るのおまえらの、伝統文化だろう、って。

馬場 しゃあない。(小林に)やれ。

チャン、小林にはさみを差し出す。小林、立ちすくむ。

小林 せめてドスにさせてくれ。

鈴木 HE SAID 「I WANT TO USE A KNIFE」

チャン OK、USE KNIFE
鈴木 勝手にしろ、と。

小林、ナイフを取り出し、流羅の指を切る。1本、そしてためらいながら2本目。流羅、悲鳴を上げる表情をするが、声が出ない。

小林 しゃべらねえとおまえ、自分でヤクを打つこともできなくなるぜ。

流羅の口がしゃべる、と動く。

馬場 しゃべるって、言ってる。

鈴木 HE WANTS TO SPEAK
チャン OK

男たち、流羅を囲み、待つ。流羅、言葉を搾り出すように言う。

流羅 夏の光だ。

鈴木 SUMMER LIGHTS!
流羅 空から降り注ぐ、驚くような明るさ。広がる緑。おれは両手を広げる。翼があるみたいに。スプリングラーが大

きな音を立てて、水を四方八方に放つ。水がおれの周りにいくつもの光の壁を作る。光の壁、光の壁、光の壁。水の回転、水の回転、水の回転。顔を冷たい光の束がた

たく。母さんが走ってくる。おれを抱き上げ、顔の高さに持ち上げる。ずぶぬれになりながら、おれをぐるぐる回す。空の回転、空の回転、空の回転。はじけだす。はじけとぶ。跳ね返る。無数の水滴。輝きの壁。輝きの壁。輝きの壁。母さんは笑っている。幸せそうに。母さんが水をかぶる。次はおれ。次は母さん。次はおれ。幸せに包まれる。ああ、夢のようだ。芝生のおい。小さな虹。スプリングラーの音。輝きの壁。母さん。

鈴木、チャンに向かって訳を説明しかけるが、やめる。

小林 ヤクで頭がいかれちまってんだな。聞き出すのは無理だよ。

馬場 そうやな。
鈴木 DRUGS BREAK HIS BRAIN、ABSOLUTELY

チャン、ナイフを取り出し、いきなり流羅の腹に突き立てる。スプリングラーが水を噴射する映像が映し出される。アフリカ音楽の「バラクラランジャンの歌」が流れる。

流羅 助けて、母さん

流羅は倒れ、死ぬ。啓子は悲鳴を上げる表情をするが、声は出ない。音楽が小さくなり、スプリングラーの映像も、フェイドアウトする。チャン振り返り、バナと啓子に初めて気づき、恐怖の表情を浮かべる。

チャン WHO? WHO ARE YOU?

馬場 2人とも、過去から来た幽霊や。日本ではよう歩き回ってんねん。

鈴木

(この男には2人は見えていないので、わけがわからな
いままに訳す) THEY ARE GHOSTS FROM
OMPASSSED TIME, THEY WALK
AROUND IN JAPAN.
これも日本の伝統文化ってやつや。

馬場
鈴木

ITS JAPANESE TRADITIONAL
CALTURE TOO.

チャン 恐怖でナイフを落とし、立ち尽くす。

馬場

人殺しには見えてまうんやな。幽霊ってやつはなあ。
KILLERS MUST SEE GHOSTS
VERY NIGHT

チャン、取り乱した様子で、走り去る。

馬場

おい、こいつを車に運べ。
小林、鈴木は流羅をかつぎあげる。

小林

リュウのやつも気の毒したな。

鈴木

まったくだ。

小林

最低のヤク中で、うそつきの役立たずだったけど、面白
いやつだった。

鈴木

ものまね、うまかったよ。

小林

そうだな。こいつ、バイニンじゃなくて、芸人になれば
よかったんだよ。

馬場

くだらねえこと言ってるねえで、さっさと運びな。

小林と鈴木、流羅の遺体をついで上手に退場。馬場 上
手に立ち去りかけるが、1人だけ、立ち止まり、振り返
る。

馬場

ねえさん、2014年に帰ったら、あのころのおれを見
つけて、言ってるやつてくれへんかな。やけ起こさんと、
ちゃんど調理師免許とって、トコハ村に帰って、イノシ
シ料理の店・・・やっぱり、やめとこ。忘れて。

馬場
バナ

あたしはどっちでも。
ありがとう。ねえさん、また会おうな。

馬場、上手に退場。

バナ

悪いもの見たね。(短い間)でも、よかったよね、最後
に思い出してくれたじゃない。

啓子
バナ

あれはあたしじゃない。
え?

あれはあの子の思い出じゃない。あたしはあの子にあん
なことをしてない。あの子は生まれたときからマンショ
ン暮らし。芝生なんてない。

啓子
バナ

じゃ、なんでかね。
あれはあたしの思い出だ。一番しあわせな思い出。母が
優しかったころ。庭の芝生で、抱きしめられて。スプリ
ンクラーの水に包まれて。あれはあたしと母さんだ。あ
たしとあの子じゃない。なんで?

さあ、わかんないね。でもあたしの村では、言うね。人
の血の中には渦巻きがあるんだと。

バナ

血の中に渦巻き?

恵子
バナ

神様は水と同じように人の血を作ったんじゃない。血の
中に渦巻きを作った。渦巻きは、それ自体が考えを持っ
ている。この人間を、どう動かし、何をさせるか。何を
させれば、世界中の水が、樹が、砂が、炎が、イナゴの
群れが、正しい働きをするか。この人間はそういうこと
のためにどう役に立つか。

啓子

わかんないよ。

バナ あんたの血の中の渦巻きは、今、行き先を見失っている

のさ。子どもが死ねば、渦巻きは、もうどこへも行けない。子どもが生きれば、未来に果てしなく広い海が広がっている。でも、自分の行き先が分からなくなった渦巻きは、わけのわかんないことをしようとすね。そういう時はじつと見るのさ。水か、樹か、砂か、炎か、イナゴの群れを。あんたの血の中の渦巻きが落ち着いて、どこに進むか、行き先を見つuckerんだよ。

啓子 バナさん。わかんないよ。

バナ 水を見な。(水を見せる)

啓子 バナさん。

バナ 何。

啓子 あたし、やめとくわ。

バナ なにを。

啓子 あの子殺すの、やめる。

バナ (驚く) そうかね。(喜ぶ) それがいいね。

啓子 バナさん、未来って変えられないの。必ず、ああなるの？

バナ あたしにはわからないね。(短い間)でも変えられると、いいね。

啓子、ほほえみ、立ち上がる。

啓子 ごめん、行くわ。保育所に迎えに行く時間だ。

バナ お茶のまんかね。

啓子 今度また来る。

啓子、上手に退場。バナ、見送る。朗読者たち6人が入ってくる。バナは6人に言う。

バナ 日本人で、変ね。本当に変だね(退場)。

第7場 バッターズ2

朗読者1 2014年度CIAファイル、ナンバー90121

重要度F、リスク判定F、キーワード・南から来るもの

朗読者2 彗星の話は聞いた？

朗読者3 日本ではどんな情報が？

朗読者5 インドネシアでは何の情報もないんだ。

朗読者6 どの政府もこの事態を明らかにしてない

朗読者1 公式には、けっして

朗読者5 それはなぜ。

朗読者4 すべてはネット上のうわさ。

朗読者2 南から来る彗星について

朗読者6 情報が飛び交っている

朗読者1 ミサイルで撃ち落とせるという人も

朗読者5、無理だと言う人も。

朗読者3 ダン、可能性は？

朗読者4 ゼロ。

朗読者1、2、3、5、6 あー。

朗読者3 ああ、早く発見できていれば。

朗読者2 せめてあとひと月。

朗読者4 後悔先に立たず。

朗読者3 ニュージールランドの観測地点が閉鎖されていたの。

朗読者1 予算不足で

朗読者5 南半球には観測地点がひとつも無かった。

朗読者4 日本の観測チームが発見できなかった。

朗読者6 バッターズがそれをヒットできなかった。

朗読者2 バッターズ。日本の観測チームね。

朗読者5 彼らにも予算がなかった。

朗読者1 宇宙を見張る予算は、どこの国も十分じゃない。

朗読者3 リーマンショック

朗読者4 フクシマ

朗読者5 お互いの国を責めるのはやめて、各国のミサイルに

朗読者3 希望を託そう。あきらめるのは早い。
朗読者6 インドのミサイル、失敗。
朗読者3 中国のミサイル、失敗。
朗読者3 フランスのミサイル、失敗。
朗読者2 イギリスのミサイル、失敗。
朗読者6 北朝鮮のミサイル、成功と発表。
朗読者1 偉大なる指導者によって、世界は救われた、と放送した。
朗読者4 話にならない。
朗読者3 ロシアのミサイル、失敗。
朗読者2 日本のミサイル、失敗。
朗読者4 アメリカのミサイル。失敗。
朗読者5 もうだめだ。
朗読者6 どの国もあれを撃ち落とせない。
朗読者5 バッターズも、誰も、あれをヒットできない。
朗読者3 危機感はまだ、世界中で高まっていない。
朗読者4 いずれはなんとかなる、と。
朗読者1 奇妙な楽観視
朗読者6 人々は普通に行動している。
朗読者2 会社に行き、
朗読者3 図書館で本を読んでいる。
朗読者6 ストックホルムでも。
朗読者5 ジャカルタでも。
朗読者1 ニューヨークでも
朗読者3 ベルリンでも
朗読者6 カイロでも、リオデジャネイロでも
朗読者2 大阪でも。なぜなの。
朗読者4 危険度について正確に発表されていないから。
朗読者6 すべてはネット上のうわさ。
朗読者2 なぜなの
朗読者1 パニックを防ぐため？
朗読者3 きっとそうよ。

朗読者2 パニックって、そんなに怖いこと？
朗読者4 政府にとってはね。
朗読者2 正しい情報さえあれば、
朗読者1 人々は正しい行動をする。
朗読者2 それを信じないの。
朗読者4 政府はね。
朗読者5 南から来るものが
朗読者4 南から来るものが
朗読者6 すべてを
朗読者2 打ち砕こうとしている
朗読者3 私たちが築いてきたもの
朗読者4 人類が築いてきたもの
朗読者2 誰にも気づかれずに近づいてきて
朗読者5 すべてを傷つけて、
朗読者3 自らも砕け散ろうとしている
朗読者1 そのものとは、大いなる、そのものとは
朗読者1、2、3、4、5、6 彗星
朗読者6 世界を打ち砕く、そのものとは
朗読者1、2、3、4、5 彗星
朗読者5 その成分は、99%、氷なんだって。
朗読者6 ということは
朗読者1、2、3、4、5 空から、氷
朗読者1 恐竜たちに降り注ぎ、彼らの命を奪ったのは隕石。
朗読者2 私たちに降り注ごうとしているのは氷？
朗読者3 水よ。大気との摩擦熱で溶けるはず。
朗読者4 大量の水。
朗読者5 太古、海は宇宙からもたらされた。
朗読者6 これからもたらされるのはもうひとつの海。世界をのみこむ大量の水。
朗読者3 海水の量が今の倍以上になれば
朗読者4 陸上のすべての命は飲み込まれるだろう
朗読者1 人類絶滅まで2カ月かからないだろう

朗読者6 ノアの箱船は、物語だ。
朗読者2 もちろんそう。現実じゃない。
朗読者5 ああ。
朗読者3 ああ、神様、神様。
朗読者4 私たちはどうなってしまうのだろう
朗読者3 世界はどうなってしまうのだろう
朗読者4 分からない。
朗読者1、3、4、5、6 不安、人類史に終わりが来る不安。
朗読者2 世界を包む不安。
朗読者1、3、4、5、6 すべての文明が砕け散ってしまう不安。
朗読者2 私の命が失われる不安。まだ20歳なのよ。
不安。

第8場 そのバックネットのバランス3

馬場 (弱っている) なんの罰ゲームやねん。なんの罰ゲームやねん。こんなところで、熊とにらめっこって。どうやねん。
八木 先輩。おれ、もう無理かもしれないです。
馬場 落ちんなよ。
八木 手に力が入りません。
馬場 落ちたらおまえ
八木 熊に食われますか
馬場 このネット倒れるやないか
八木 先輩も食われてしまいますね。ははは。
馬場 笑うな。
八木 死ぬ前に、水飲みたいな。
馬場 飲んだらええやないか
八木 水筒がないんです。走っているうちにどっかで落としました。
馬場 持ってるんですけど、なんです

馬場 おれのや
八木 一口だけ、飲ませてもらえませんか？
馬場 おれのやいうとるやろ
八木 一口だけ
馬場 少ししかないんや
八木 (間) 先輩。
馬場 なんや
八木 アマゾン川委員会って知ってますか？
馬場 なんの委員会やて？
八木 アマゾン川。いくつもの国を通って流れている川って
馬場 いるのが、世界にはあるんですよ。ナイル川とか、メ
八木 コン川とかね。国際河川っていうんですけどね。
馬場 ものしりやな。
八木 アマゾン川ではね、委員会をつくったんです。南米の、
馬場 多くの国が集まって、川の水量を計算して、うちの国
八木 では小麦をこのくらい作る、水力発電でこのくらい水
馬場 使う、工場排水はこんなくらい流すねん。だから水がこ
八木 のくらいいるんやって。インターネットを使って、み
馬場 んなで話し合って、どのくらい使っていいかを決める
八木 んですわ。そういう話し合いの場ができたんですよ。
馬場 だからなんやねん。
八木 人類は、そこまで来たんですよ。水を取り合って、石
馬場 油を取り合って、戦争をしていた時代から、話し合っ
八木 て、殺し合うことなく、傷つけあうことなく、お互い
馬場 の財産である水を分け合う。それができるんです。戦
八木 争でなく、話し合いです。それができるんです。人類
馬場 は。動物とは違うんや。
八木 それがどうしてん。
馬場 分からないですか。ぼくらは、バックネット委員会です
八木 よ。
馬場 なんやそれは。
八木 持っているものを奪い合うんでなく、分け合うんです

馬場 よ。二人とも、少しでも長く生きるために、協力しましょう。水を分け合うんです。先輩、ぼくらは、人類や。それができる。あそこにいる熊たちとは違う。そう思いませんか？

馬場 八木、バックネットをよじ登る。馬場、水筒を取り出し、八木に差し出す。八木飲む。

馬場 八木。

八木 はい。

馬場 映画の話せえや。

八木 この期に及んで、まだ聞きたいっすか。ええやないか。途中まで聞いたんや。続き知りたいやないか。

八木 占いの館に、今度は若い男が訪ねてくるんですわ。先輩とは真逆のタイプ、いうたら、草食系いうんすかね。植物系いうんすかね。

馬場 飛べるで、今度こそいけるかな。

八木 無理ちやいますかねえ。ちやちやもん、これ。

第9場 のろわれた楽園3 熱帯水槽
バナ、登場。

バナ 入っついでいいよ。
上手から健一登場。神経質そうな青年。着ぶくれている。非常に緊張した、暗い感じが入ってくる。

バナ 若者よ、恋の悩みかね。何を占ってほしいのかな。

健一 実は（口ごもる）
遠慮することはないね。悩みは人それぞれ。アフリカ仕込みのこのバナさんは、どんな悩みでも聞くよ。口も堅いね。何でもぶつけていいね。何でも占ってあげるよ。

バナ 健一
おー、これは意外意外。（自分を指さし）バナさんは占い師ね。善良な占い師のところに、他に、どんな用件で来られたのかな！

健一 あの、人を、呪い殺してくれるって聞いて。

バナ （カーテンを閉める）大きな声、ダメね！
え？
人に聞かれたら大変ね。呪いかけるの、私の裏の稼業。ばれたらやばいよ。

健一 すいません。
誰を呪い殺してほしいね？自分をだまして捨てた、女？

バナ 健一
そうじゃありません。
許せない上司か？

健一 そういふわけではありません。
ではどのような人に、私に呪いをかけてほしいね？
実は、名前も知らないんですよ。

バナ 健一
知らない人を殺そうなんて、見かけによらず凶暴ね？
これには事情が。
聞くよ。

健一 何から話せばいいかな。
バナ あなたの、そうね、仕事から。
港の近くの、水族館に勤めています。

バナ 健一
え、そうなの？私ときどき行くよ。アシカショー大好き。
僕は熱帯水槽を担当しています。
何それ。

健一 熱帯地方の魚ですね。フエフキダイとか、チョウチョウウオとか、そういう日本ではなかなか見られない魚を入れた水槽ですよ。管理が難しい。

バナ 珍しいね。

健一 そう、珍しい魚が多いんです。

バナ いや、そうじゃなくてね。そういう仕事って楽しいでしょ。

健一 大変だけど、やりがいがありますよ。

バナ 楽しい仕事をしている人が、人を殺したくなったり、するもんかね。

健一 かなり変な話でね。事実なんだけど、信じてもらえないかもしれない。僕も、自分の頭が変になったんじゃないか、とずいぶん悩みました。

バナ どんな話ね。興味あるね。

健一 最初は昨年、野球の試合を見に行ったときでした。

バナ あんな難しいスポーツ、日本人好きね？

健一 僕はそうでもないんですが、友人に誘われて。

バナ そこで何があったね。

健一 満塁ホームランが出て、スタンドでウエーブが始まったんです。

バナ 野球わかんないから、今の話は分からないね。

健一 得点が入ったときに、みんなで祝福するんですよ。こうやって、スタンドで多くの人間が立ったり座ったりして、波を作る（やってみせる）

バナ おー、面白いことをするね。アフリカ人なら、太鼓をたたいたり、ラッパを吹いたりするね。波を作っただうするね。

健一 そのとき、あいつに気づいたんだ。

富樫、下手にふらりと登場。健一とまったく同じ服装。2人、ウエーブを繰り返す。

健一 上から下まで、僕とまったく同じ服装。

富樫、ウエーブをしながら退場していく。

バナ そんなことで、殺してしまいたくなるのは、見かけによらず凶暴ね。ユニクロで、偶然同じ服を買ってしまうことはきつと、あるね。

健一 その1回だけじゃないんですよ。

バナ まだあるね。

健一 電車に乗ってました。

健一、服を脱ぐと、普段着姿になる。つり革をつかむマイム。

電車の音、駅のアナウンス。ナゾの男、健一と同じ服装で、下手から登場。地下鉄に乗り込んでくる。

健一 外は土砂降りでした。まるで水のトンネルの中を走っているみたいで、外が見えない。窓はシャワーを浴びせられているように水がはじけているのが分かる。

発車し、電車が揺れ、富樫に気づく健一

健一 また、同じ服装だ。上から下まで。

読んでいる本が同じであることにも気づく。

健一 同じ本を読んでいる。

ナゾの男、下手に退場していく。

健一 これだけでもないんです。

バナ まだあるね。

健一 クラブに行っただんですよ。職場の仲間と、踊りに。

健一、服を脱ぐと派手なシャツ姿になる。音楽。健一、やや奇妙な踊りをしながら、舞台上手に動く。上手からまったく同じ服装の富樫が飛び出し、やはり奇妙な踊りをしながら健一とすれ違う。

健一 またあいっだ。

富樫、健一に気づかないのか、楽しそうに、生き生きと踊りまわり、戸惑いながら踊る健一と、それぞれ左右に動き、気づかずに幸せそうな富樫が何回かすれ違う。

健一 どういうことなんだ。

バナ 偶然ってことはあるね。気にしすぎかもよ。

健一 そしてついに。

バナ まだあるね。

健一 仕事場にまで、彼が現れたんです。

バナ 水族館。

健一 そうです。グラスキャットフィッシュの水槽の前。

バナ なに、それ、魚。

健一 魚です。グラスみたいに透明なんです。だからグラスキャットフィッシュ。

バナ 変わった魚だね。

健一 僕はその前にいた。仕事だったから、作業服でした。

健一、服を脱ぐと、作業服になっている。

健一 僕は、グラスキャットフィッシュが好きで、いつも見とれてしまう。なんてきれいなんだろう、と。よく見ないと、水と一体となって見つけられない、熱帯の魚の群れ、まるでたくさんの魚の目と、背骨だけが、水槽の中でゆらめいているように見える、そんなガラスの魔法。その前に、彼がゆつくりと現れた時、僕は何か揺らぐように感じた。

作業服姿の富樫が静かに登場。

健一 作業服を着て1人で水族館に来る客が何人いるんだろう。

もちろん、いるにはいる。でも、グラスキャットフィッシュの水槽はさんで向かい合って、また上から下まで同じ服装の彼が、立っているのを見た時、僕は足下が崩れていくように感じた。まるで、あそこにいるのが本物で、ここにいるのは水槽に写った彼の影なのかもしれない。ここに存在するのは本当に2人の男なのか。本当は1人で、どちらかが影とか、幻に過ぎないのではないか。

富樫 えっ。

健一 そう、この日はいつもと違った。彼は僕の存在に気がついたんです。しばらく、僕たちは透明な魚の群れが泳ぐ、水槽をはさんで、見つめ合っていました。

バナ 面白いね。

健一 面白くありませんよ。僕は、自分が消えてしまうかと思つた。自分は彼の水槽に写った影で、電気を消せば消滅してしまうんじゃないかと。まるでグラスキャットフィッシュのように透明になって、熱帯水槽の中に溶け込んでしまい、誰も気づかれなくなってしまうのではないかと。

バナ 人なんだから、消えてしまうことはないね。

健一 そうなんだ。でもそういう不安を感じるのは、なぜだろう。(間)しばらくして、彼の方が動いた。日曜日の人混みの中に、静かに消えていった。だいじょうぶだ。僕はいる。存在している。

富樫、去る。

バナ それで分かったね。

健一 何が？

バナ 彼は、実在するね。

健一 当たり前だ。実際見たんだから。何度も。

バナ 最初はあんたの幻覚かと思ったよ。ドッペルゲンガー現象っていうのかね。そうじゃない。実在するんだ。ならば、呪いをかけることはできるね。

健一 最初感じていたのは、いらだち、不快感でした。でもだんだん、その気持ちは変わってきた。恐怖にです。僕、とても怖いんです。雨の日に窓を見ていました。2つの水滴が左右から窓を伝う。それは1滴の水滴となり、そのまま流れていく。そんな風にして、自分とあいつはひとつになっちゃって、誰も気づかないまま、自分というものがなくなっちゃったのではないか。そういうことじゃないか。もうやつを殺すしか、自分が生き残ることはできないんじゃないか。

バナ それで、ここにきたね？

健一 怖いんだ。僕はやつに殺される夢まで見たんだ。

バナ 夢を見たのか。

健一 そうなんだ。恐ろしい夢だった。今でも細かいところまで思い出せる。

バナ (喜ぶ) それはいいね。思い出して、思い出して。

健一 原発事故の夢だよ。

バナ 夢は流れてる。流れてるものなら、私はなんとかできるね。

照明が暗くなり、非常に緊迫した様子で健一は白い防護服を身につけながら話す。

健一 水族館から20キロ離れた原発で事故が起きるんだ。水族館のスタッフはみんな退避するんだけど、魚たちにえさをやるために1日1人、当直を置くことになるんだ。独身のスタッフが選ばれて、線量計を持って、防護服を身につけて、えさをやりながら、水族館の中で1日を過ごすんだ。24時間を過ごして、交代の男がやってくるんです。静かな雨の夜、

水族館の明かりは消え、水温を管理する装置のブーンという音だけが響く。そんな中、足音が。

富樫、白い防護服を着て、上手から静かに現れる。

健一 またあいつだ。

バナ はー。

健一 水族館のスタッフじゃない。

健一、富樫に向かい合う。2人、顔を近づけ合って立つ。ボクサーが、試合前にレフェリーから注意を受けるときのように。

健一 このやろう、いつもおれと同じ服ばかり着やがって。

富樫 仕方ないでしょう、このシチュエーションでは。

健一 どういうつもりなんだ。

富樫 どういうつもり？あんたこそどういうつもりなんだ。あんな、あんたって人のつもりなのか。他人と違う、あんたって人なのか。ふざけるな。

健一 ふざけてなんか。

富樫 同じ服装をされるのが嫌なのか？今は非常時だ。非常時じゃないって言うのか？そんな意見、誰に言ったって通らないぞ。非常時にはみんな、同じ服装だ。世界中のどこの軍隊が個性ある服装を認めているんだ。どこの警察が？どこの消防署が？どこの原子力発電所が？どこのプロサッカーチームが？おれたちは同じ服装で戦うんだ。そこに一体感があり、勝利に向かうためのチームワークってものがあるんだ。

健一 おれは。

富樫 戦っていない時のことを言っているんだ、ってか。は？戦っていないおまえに、価値なんかあるもんか。チームの一員でない、一人のおまえになんか。自分は人と違う、自分の個

性ってものがあるんだ、おまえそう思っていないか。それは思
い込みだ。

健一 思い込み？

富樫 おまえに個性なんかあるものか、結局、大勢の中の一人、

たくさんの水滴の中の1滴だよ。おれたちは。ただ、流れに
合わせ、流れの中で、流れていくだけだ。生きていたって、
死んでいたって、誰も気にしたりしない。コピーのひとつき。

健一 それは違う。

富樫 違いはしないさ。結局、おまえはコピーのひとつなんだ。

おまえなんて、いないんだ。熱帯水槽の電気をつけな。

健一 節電を指示されているんだ。

富樫 うるさい。つける。

健一、気おされるように、壁のスイッチを操作する。照明が
つき、巨大な「熱帯水槽」が浮かび上がる。水槽の中には、
黄色いチョウチョウオの大群がひとつの方向を向いている。

富樫

こいつらと同じさ。チョウチョウオの中のどいつが他の
どいつと見た目が同じだって、悩むんだ。みんな同じ姿だ。
フエフキダイだって。同じ姿じゃないっていうのか？同じだ
ろ。キイロハギも、ノコギリダイも、回遊するイワシも。こ
れと同じさ。おまえなんかいないんだ。水滴のひとつき、他
の水滴と当たって消えちまうのさ。

健一 それは違う。

健一、富樫につかみかかると、簡単にねじふせられる。富樫
は健一の防護服の顔の部分をむしりとりしてしまう。

富樫 放射線でもくらうんだな。

健一、倒れたまま悲鳴を上げる。富樫は高笑いしながら上手
に退場。バナ、奇妙な機械を物入れから取り出し、機械につ

いているハンドルをぐるぐると回す。沈黙。健一、起き上が
り、あわてたようにあたりを見回す。

健一 どういうこと？ここで目が覚めたはずなのに。

バナ あんたの夢の中だよ。

健一 え、どういうことだよ。

バナ だから、あんたの夢の中に今、2人で来ているんだよ。夢
はあたしが巻き戻しておいたよ。

健一 は？

バナ 夢は巻き戻しておいたよ。だから、今、夢が始まる場所
だよ。

健一 どういうこと？

バナ 人を呪い殺すより、簡単ね。あんたはその、殺そうとして
いた彼に負けっぱなし。それがいけないね。1回、やつつけ
ないとね。そいつにやられたことを、やり返せばいいね。血
の中の渦巻きが、正しい方向に巻き始めるには、そうするの
がいいよ。さ、あたしは隠れてみているからね。さ、「ハム
レット」が始まる（壁のスイッチに触れて、熱帯水槽の電気
を消す。隠れる）。

健一、立ち尽くす。そこに足音。白い防護服の富樫が現れる。
2人、向かい合う。

健一 このやろう、いつもおれと同じ服ばかり着やがって。

富樫 仕方ないでしょう、このシチュ...

健一 どんなシチュエーションだろうが、関係ない。おまえはお
まえで、おれはおれだ。同じ人間じゃないんだ。同じよう
なもんだって言うつもりか。ふざけるな。

富樫 ふざけてなんか。

健一 人と違う服装をするのが嫌なのか？誰かと同じ人間なら、
安心できるだろうさ。今は非常時だって言って、みんな一丸
となって、乗り越えようって、一緒に我慢するんだって、言

えば、楽だろうさ。でもそうじゃないんだ。おれはおれ、おまえはおまえだ。そうじゃないっていうのか？そんな意見、誰に言ったって通らないぞ。一人ひとりがすべて、違う人間だ。おれは俺の痛みを感じ、おまえはおまえの苦痛にのたうつんだ。同じじゃないんだ。

富樫 世界中のどこの

健一 「軍隊が個性ある服装を認めているんだ」ってか。戦争で死ぬときは、おまえは一人の個人だよ。全体の中の一人じゃない。自分の痛みを抱えて、自分の絶望を抱えて、自分の孤独を抱えて死ぬんだ。体の一部を吹き飛ばされて、血だらけになって、泥沼にひざまでつかって、立ったままでな。そこに一体感もなければ、高揚感もない。国家もない。チームワークもない。あるのはおまえの痛みと孤独と不安だ。おまえが死ぬんだ。おれが死ぬんだ。

富樫 おれは。

健一 一人の人間に、価値なんかあるもんかって言うのか。あるのさ。一人ずつそれぞれの価値があるんだ。生きていていい理由があるんだ。だから苦しいんだ。一人ひとり、他の人間と違うんだ。おれも。おまえも。それが生きていてることだ。自分には個性なんかない。おまえそう思っていないか。それは勘違いだ。

富樫 勘違い？

健一 おれたちは一人だ。結局、大勢の中の一人、たくさん水滴の中の1滴だっと思ってらる。ただ、流れていくだけだ。そんなことはない。人間は水滴じゃない。ワイパーで拭い取ったりできない。おれたちは水滴じゃない。何かのコープでもない。おれはおれだ。おまえはおまえだ。その苦痛に耐えなきゃいけないんだ。

富樫 それは違う。

健一 違いはしないさ。おれはいるし、おまえもいるんだ。熱帯水槽の電気をつける。

富樫 節電を指示されているんだ。

健一 つける。

富樫、気おされるように、壁のスイッチを操作する。照明がつき、巨大な「熱帯水槽」が浮かび上がる。水槽の中には、黄色いチヨウチヨウオオの大群がひとつの方向を向いている。

健一 こいつらだっかってそうさ。一匹一匹、違う魚なのさ。こいつ

の命はこいつの命、他の命と取り替えたりできない。同じ姿だ？。よく見るんだ。一匹一匹、違うんだ。少しづつ違うんだ。よく見る。お前もいる。おれもいる。命を持つてる。そうじゃないっていうのか？よく見るよ。おれたちは水滴じゃないんだ。他の水滴とあたって、なくなったりはしないんだ。

富樫、健一につかみかかるが、健一は簡単にねじふせる。防護服の顔の部分を目しりとろうとして、やめる。健一、脚立を立てて、熱帯水槽に登り、ふたを外す。

富樫 やめろ。水槽が汚染される。

健一 うるさい。

健一、透明な魚を一匹、つかみ出して見せる。

健一 見えないが、これは魚だ。存在する命だ。

富樫は逃げ去る。健一は元の服装に静かに着替える。

バナ (拍手する) よくやったね。

健一 これでよかったのか。

バナ あんたは水滴じゃない。ワイパーで拭かれて、なくなったりしないよ。

健一 ありがとう。

バナ 夢の巻き戻し料を置いていってね。5000円でいい。

健一 分かりました（金を置く）。なにか、心が軽くなった気持ち
ちがします。ありがとう。

健一、上手に退場。バナの部屋の照明が静かに暗くなり、健
一が舞台の前の方に歩み出る。待合室という想定。

健一 （待っている男に声をかける）お待たせしました。

同じ服装をした、富樫が顔を上げる。2人は、一瞬、驚きで
固まる。

健一 呪い殺しに来たのか、僕を。そんなわけにはいかない。僕
は、水滴じゃない。ワイパーで、拭い去れたりしない。

健一、ドアを開け、外に出る。また、健一と同じ服装の、
別の男がゆっくりと歩いてくる。舞台を左から右へ横切る。
さらに同じ服装の別の男、さらに同じ服装の別の男。健一、
静かに立ち尽くす。

健一 水滴じゃない。ぬぐい去られたりしない。水滴じゃない。
消えたりしない。

歩み去る。

第10場 バッターズ3

朗読者1 2013年度CIAファイル、ナンバー92121

朗読者2 重要度不明、リスク判定不能。キーワード、水
みんなどうしてる？

朗読者3 生きてるよ。人生の最後の時を生きてる。

朗読者4 もうすぐ死ぬけど。
朗読者5 理解できずに苦しんでいる。

朗読者1 自分の運命を。

朗読者6 運命なんてあるのか。

朗読者1、2、3 ない、いや、ある。

朗読者4、5 ある。いや、ない。

朗読者2 どの国も、正式に発表していない。人類の運命を。

朗読者3 最後の努力をしているのね。

朗読者2 でももう無理なんだわ。

朗読者4 公表すべきなんだ。人類が減びると。

朗読者3 パニックを恐れているのね。

朗読者5 みんなが最後の時を知るべきだよ。

朗読者6 そうすればみんなが最後にすべきことをするだろう。

朗読者2 家族に別れを告げるとか。

朗読者3 私、ダイエットをやめるわ。好きなだけアイスクリ
ームを。

朗読者4 貯金を全部下ろして、そうだね。ラスベガスに。

朗読者5 祈る。

朗読者6 おれは祈らない。最後の時を見届けるさ。

朗読者3 私、どんな風に死ぬの？

朗読者2 ハンナ、それは考えない方がいいわ。

朗読者6 考えなくても、もう2日後には彗星は地球に衝突す
る。

朗読者5 想像しなくても、おれたちは生き残れない。

朗読者4 大量の水が世界に降り注ぐまで、あと2日。

朗読者3 でも知っておきたい。私はどんな風に死ぬのか。

朗読者5 ユリ、最後に言いたいことがあるんだ。

朗読者4 ハンナ、教えよう。

朗読者6 ダン、教える必要はないよ。

朗読者2 何？最後に言いたいことって。

朗読者5 ユリ、君のことが好きだ。

朗読者2 こんな時に何を言っているの。

朗読者4 彗星はほとんどが氷だ。大気との摩擦で溶ける。

大量の水が世界のどこか、たぶん海だろう。そこに

降り注ぐ。地球上の海水が、一瞬にして、今の2倍の量になるんだ。

朗読者6

ダン、やめるよ。

朗読者5

ユリ、君にステディな彼がいることは知ってる。

朗読者2

でも、今、それが何の意味があるだろう。今、彼は君のそばにいるの？

朗読者5

いいえ。もうけ話があるからって、仲間と山に登って、それっきり。

朗読者6

君のことを本当に思っているのは彼じゃなくて、僕だ。たとえ、遠く離れていても、外国人であっても、それは僕だ。2日後にみんな死ぬとしてもそれは真実だ。

朗読者4

ハンナ。海は膨張を始める。陸へ陸へ。まちをのみこみ、やがて山をのみこむ。ハンナ、君はいつもの大学のランチルームにいる。素晴らしい秋晴れた。天井も、壁もガラスで、美しい山並みが窓の外で白く輝く。

朗読者2

グンナール、ありがとう。でももう遅いかな。

朗読者5

君と出会った時、心が騒いだ。君が国連ビルの前で、僕の冗談で初めて笑ってくれた時、もっと心が騒いだ。でも僕は気づいてなかった。恋だって、分かっていたらなかったんだ。

朗読者4

海は、轟音を立てて、大学に迫ってくる。家々を倒し、木々を折り曲げ、電柱をねじふせる。君は、手元の携帯電話が急に圏外になったのに気づく。顔を上げると、ランチルームのテレビの画面が、静かに消える。

朗読者5

ユリ、それからは、君のことばかり考えてる。詩をつくったんだ。君のことを思いながら。

朗読者2

詩をつくったの？こんな時に？

朗読者5

へたくそな詩だけど、読んでほしいんだ。

朗読者4

やがて、揺れが始まる。水が近づいてくるんだ。だ

れかが、絶望的につぶやく。
ウオーター。

朗読者6

動物園のカバが昼寝をしても／その見えない尿管の中には／ザイルの輝く川が音を立てている

朗読者2

グンナール

朗読者5

空港に向かう地下鉄で君が笑顔を見せると／君の足下からわき起こった水が／僕の肩へとひざへと落ちかきり／滝の奥の深い森が／車両の側壁を覆い隠していく／そのジャングルでは／鳥のような声で猿が叫ぶ

朗読者4

やがて水がランチルームのガラスの壁に突き当たり、水かさを増していく。君は見るだろう。まちから流されてきた車、家、荷車、郵便ポスト、そういったものがランチルームの壁にぶつかるのを、そして、ガラス張りの天井の上を転がるように流れていくのを。

朗読者5

パールの間で／君が突然涙目になる／思い出したんだ／日本のまちのことを／残してきた家族や恋人のことを／僕の背後の星座たちから／飛び出してくる怒濤／僕は何かに飲み込まれながら／君を見ている

朗読者4

ガラスの中は、ランチルームは静かだろう。だけれども何も言えない。自分の運命を受け入れ、ただ、呆然と、水を見つめるだけだ。

朗読者5

その流れがどこへとながり／どんな森を生み出すのか／わからない／たしかなこと／車両の側壁に／誰かがいたずらで張ったシールをはがせる／だれかがはがすだろう／でも空から星座をはがすことはできない／川は海につながり／その水を消すことはできない

朗読者4

そして君は見るだろう。ガラスの壁をついに、流されてきた観光バスが突き破る。足下に刃物のような冷たさで水が流れ込んでくる。初めて、誰かが悲鳴

朗読者5
を上げる。背後でも、大きな音。今度は漁船だ。天井のガラスを突き破って、へさきを下にして、ランチルームの吹き抜けの階段に、すさまじい音を立てて落ちてくる。大量の水とともに。
足下の奔流にとまどいながら／何を飲み込むか分からない／頭上の滝に／こころ打たれながら／僕は君を見ている／ずっと

朗読者4
その時、君は思うだろう。

朗読者3
ああ、ここで死ぬんだ。私はこれから死ぬんだ。

朗読者4
君はきつと自分あまりにも小さい存在だと思っただろう。巨大な海の前のわずか1滴の水。それに過ぎない。

朗読者2
グンナール、ありがとう。

朗読者5
ユリ、ありがとう。

朗読者4
ハンナ、おれは今、窓を伝う雨の滴を見ている。他の滴とぶつかり、消えていく。2日後に俺たちに起こることは、結局、そういうことかもしれない。

朗読者3
そうね。そうかもしれない。

朗読者1
そして、そうではないかもしれない。

朗読者3
血の渦巻きは、終わりを知っているかもしれない。
全員
すべては、終わるかもしれない。

溶暗。

第11場 そのバックネットのバランス4

馬場、八木はバックネットの表側にいる。裏側には中国人2人、チャンとシユウ。4人は、力いっぱい、ののしりあっている。以下のせりふは、全員、一斉に近い形でしゃべる。

馬場
おまえら来るな。ここはおれらがずっとおったんや、

チャン
おまえら来たら倒れるかもしれないやないか。おれらの領土や、侵略する気か、われ。どういいうつもりじゃ、われ。ぶち殺すぞ、こら。
日本人、勝手なこと言うな。熊いるんだ、食われると言うのか。こら。おまえらの都合ばかりでものいうんではないぞ。これが（バックネットをたたき）おまえらの所有物とでもいうのか、日本領だともいうのか、その誤りに気がつかないのか。なにをいつてるんだ。殺してやろうか。殺すぞ、こら。

八木

やめるよ。これぐらぐらやで。4人もつかまって、もつかどうかわからんで。先輩。やめてください。暴れたら、これ倒れますよ。4人も熊に食われてしましますよ。

シユウ

やめる、これ不安定だ。おまえら落ち着け。命が大事だ。日中友好でいこう。これ倒れたら逃げるところがないだろ。熊に食われたいのか。おまえらいい加減にしろ。チャン、すぐ頭に血が上るの、おまえ何とかしろって言っただろ。日本人も落ち着け。ここは停戦だ。日中友好だ。

チャン、拳銃を取り出し、馬場に向ける。一瞬沈黙。

八木

やめる。

馬場

上等や。撃ってみい。
先輩が撃たれて落ちたら。

八木

このネットこつちに倒れるじゃないか。チャン、やめろ。

馬場

やめる、みんな死ぬぞ。
撃ってみい。へたれ。

八木

先輩もやめてください。
根性なしか、おのれ。でかいもん、持つといて、撃てへんのか。ほら、撃ってみい。へたれ。

馬場

シユウ チャン、撃つんなら、熊を撃て。

馬場 おら、撃つてみい。

八木 熊を撃てよ。熊を撃てばいいじゃないか。人を撃つてどうするんだ。

馬場 おれを撃つんやろ。ほら、やってみい。

シユウ チャン、熊を撃て。 SHOOT THE BEAR・

チャン、SHOOT THE BEAR・YOU UNDER

STAND? SHOOT THE BEAR

八木 熊を撃つんだよ。熊を撃てつて。

馬場 おれを撃つんやろ。とつととやれや。根性なし。ほら、

撃てや。こら。インポ野郎。撃てや。

チャン、怒りのあまり、馬場に向けて2発撃つ。間。

馬場 はーっ。このどへたくそ。この距離で外すつてどうい

うことやねん。へつたくそやのう。あほー。

チャン 調子に乗るな。この野郎。次は当ててやる。

シユウ チャン、いいかげんにしろ。

八木 あ。

4人、一方向に注意を引きつけられる。

シユウ ウォーター！

音楽。4人、あつげにとられた表情。

八木 この野球場、スプリンクラーだけ生きてたんや。

馬場 こんな廃墟に水まいてどうすんねん。

八木 あ。

馬場 どうした。

八木 熊逃げた。

馬場 熊つて、水嫌いなんな。

4人 あ。

全員、バックネットを降りて走り出す。溶暗。

第12場 巨大彗星の回避

洞窟の中。泉の中にバナがいて、祈りをささげている。

泉のそばに牛山と鹿田、少し離れて健一と啓子が真剣

な面持ちで立っている。馬場、八木が登場、様子をう

かがう。

先輩、あれっすかね。

あれやな。

PWっすね。

パーフェクト・ウォーターやな。

でも、おばさんが中に入ってます。

おばさんが入ってるな。

おばさんが入ってる時点でパーフェクトとは言えない

んやないですか？

細かいこと言うな。ここは、勝負所や。気合い入れる。

はい。

なめられんな。

はい。（強面風に近づくが、その場の雰囲気の様々に気づ

いて、とりあえず下手に出る）お取り込み中、失礼し

ます。

なんです。

本当に取り込んでいるんだが。

失礼します。この土地の所有者の方を探しているの

です。

私は所有者の一人です。

話が早い（振り向いて八木とハイタッチ）。この土地

鹿田 言っただろ。ダメもとだ。
牛山 で、ダメなの。
バナ こういう時のためにあんたたちに来てもらったわけさ。
健一 えっ
啓子 あたしたちって
バナ 竜の氷を砕くには、言葉をぶつけるしかない。いいか。
泉の真ん中に立って、地球の奥にいる竜に向けて言葉
をぶつけるんだ。
啓子 どんな言葉をさ。
バナ 自分で考えるのさ。
健一 自分で？
牛山 なんかに呪文とかあるんじゃないの？
バナ いいか、人間がぶつけられる一番重いものが言葉だ。
魂をちぎったもの、それが言葉だからだ。魂をできる
だけ大きくちぎって、それをぶつけるんだ。
啓子 分かんないよ。
バナ 一人一人、違うんだ。あんたの言葉をぶつけるんだ。
健一 分からない。僕にどんな言葉があるっていうんだ。
バナ 自分で見つけるんだ。
啓子 わかんないわ。
八木 じれったいな。(泉に飛び込み、叫ぶ)地球をなんと
かしてくれ。
バナ それじゃダメだ。きのうきょう魂の表面に出てきた言
葉をぶつけてもダメだ。魂を大きくちぎるんだ。でき
るだけ大きく。
八木 おれは、いっばい、いい思いがしたい(叫ぶ)。
氷の音

牛山 牛山、泉に飛び込む。
鹿田 おれは官僚なんかやめたいんだ。演劇がやりたい。
ええっ。
氷の音。けっこう大きい。
バナ そうだ。そういうのでいいんだ。(馬場を振り向き)
馬場 あんた行け。
馬場 おれ？
バナ そういえばあんたに伝言があるよ。
馬場 おれに伝言ってだれから。
馬場 あんたからさ。
馬場 おれから？
馬場 やけおこさねえで。
馬場 おこしてへんよ。
バナ ちゃんと調理師免許とって。トコハ村さ、けえって。
馬場、驚いた表情。
バナ イノシシ料理の店。やめとこ、忘れて。
馬場 忘れてってどういうことだよ。
バナ あんたがそういった。
馬場 イノシシ料理の店をどうするんや。途中でやめんなや。
バナ あんたが途中でやめたんだよ。
啓子 分かった。
啓子、泉に飛び込む。
流羅。
氷の音。音楽。

健一、泉に飛び込む。

健一 見えないが、それは魚だ。存在する命だ。

氷の音。

馬場 畜生。何の罰ゲームだよ。

馬場、泉に飛び込む。

馬場 返せ。トコハ村さ、けえせえ。

大きな氷の音。

バナ いいぞ。もう少しだ。

バナ、泉の中央へ進む。

バナ あたしの先祖は初めて山で炎を見つけた。それで本当に良かったのか。曾祖父はウランを見つけた。それは罪なのか。罰せられなければならないのか。教えてくれ。あたしはなんなのか。血の渦巻きは、今、「終わり」を探っているのか。

大きな氷の音。

バナ まだか。

鹿田、泉に飛び込む。

鹿田 オルゴール。

氷の割れる音。

バナ いいぞ、みんな水をたたけ。

全員、水をたたけ。繰り返す。チャンとシユウ、姿を見せるが、呆然とこの儀式に見入る。

参加しろ。おまえらも。

馬場

急げ。世界終わるぞ。

チャンとシユウ、わけがわからないまま、泉に飛び込み、この儀式に参加する

バナ いいか。みんな竜に聞こえるように。言うんだ。ありがとうを言うんだ。

馬場

ありがとうってなんだ。

バナ

竜を動かすには、ありがとうだ。

八木

おれたち、竜に会ったことないから

バナ

今度はある私たちの心をちぎり取るんじゃない。人類として言うんだ。あんなたちの血の中の渦巻きの声に耳を澄ますんだ。そして、その声を竜に届けるんだ。

牛山

人類として？

牛山

いいか、始めるぞ。ありがとうをいうんだ。続けて言うんだ。東京五輪で輝いた、あの福島のランナーのようにいうんだ。いいか、あたしに続け。ありがとうございました。

鹿田

音楽をありがとうございました。

健一

言葉をありがとうございました。

啓子

道具をありがとうございました。

文字をありがとうございました。

八木 ピラミッドをありがとうございます。
馬場 パルテノン神殿をありがとうございます。
チャン 万里の長城をありがとうございます。
シュウ アジャンター・エローラ石窟の彫刻群をありがとうございます。

バナ モーツアルトをありがとうございます。
牛山 ストラビンスキーをありがとうございます。
鹿田 ビートルズをありがとうございます。
健一 ヴァン・ヘイレンをありがとうございます。
啓子 マイケル・ジャクソンをありがとうございます。
馬場 ザ・ブルー・ハーツをありがとうございます。
八木 ピカソをありがとうございます。
チャン ロレックス・デイトナをありがとうございます。
シュウ 物語をありがとうございます。
バナ 紫式部をありがとうございます。
牛山 ガルシア・マルケスをありがとうございます。
鹿田 野球をありがとうございます。
健一 デイズニールランドをありがとうございます。
啓子 ミュージカルをありがとうございます。
馬場 エビフライをありがとうございます。
八木 マクドナルドをありがとうございます。
チャン アイフォン5をありがとうございます。
シュウ 電気冷蔵庫をありがとうございます。
バナ 原子力発電所をありがとうございます。
牛山 人工衛星をありがとうございます。
全員 人類はもう、走れませんか。

竜の鳴き声。

バナ いいぞ、水をたたけ。

全員、水をたたけ。しかし、やがて一人、また一人と、

前方の何かに気づき、水をたたけ動きを止める。表情は恐怖と戸惑いで凍り付いたようになる。最後にバナもそれに気づき、動きを止める。全員前方を見つめて凍る。

バナ 熊だ。
牛山 落ち着け、動くな。逃げるとやられるぞ。
八木 どうするんだよ。
牛山 ならむんだ。静かに、目力で、追い払え。

全員、熊とにらみ合う。

溶暗。

第12場 エピローグ

バナ、馬場、八木、牛山、鹿田、チャン、シュウ、健一、啓子がバックネットにつかまっている。

馬場 何の罰ゲームだよ。何の罰ゲームだよ。
シュウ 日本人、騒ぐな。倒れるぞ、これ。
馬場 やってらんねえよ。おまえらいいよ。おれたち、きょうずっとここにいるんだぜ。大体、その中国人、拳銃持ってたのに。

チャン 文句言うな。
馬場 全弾外すってどういうことだよ。どんだけ下手なんだ。
チャン うるさい。やるかこの野郎。

健一 やめてください。
シュウ いいかげんにしろ。これ倒れるぞ。落ち着け。
鹿田 天気がいいですね。
牛山 そうだな。

鹿田 ここんとこ忙しくて、空なんて見てなかった。きれいなもんですね。青くて。そうだな。

牛山 あのー、それで、地球は大丈夫なんでしょうか。

八木 どうなんだろうね。

馬場 どうなんだろうって、あんた無責任な。

バナ あとは竜次第だね。翼を使えば、私たちが助かるね。

啓子 どっちなんだろうね。

バナ 私にはわかんないね。でも、助かると、いいね。

鹿田 熊いなくなったら、野球やりたいな。

牛山 昔、選手だったんだってね。

鹿田 ピッチャーでした。もう一度、ボール投げたいな。

健一 僕もピッチャーでした。いいですね。キャッチボール、しますか。

鹿田 そうしましょう。天気、いいしね。

音楽。溶暗。

幕。

〔参考文献〕

- 大隕石衝突の現実(日本スペースガード協会著)NEWTON社
- 隕石コレクター(リチャード・ノートン著)築地書館
- バラクラランジャンのうた(こんどうなつみ)リーブル社
- ガダラの豚(中島らも)集英社
- 津波と観音(畑中章宏)亜紀書房
- となりのツキノワグマ(宮崎学)新樹社
- クマの畑をつくりました(板垣悟)地人書館